ＣＧＳ公開ワークショップ

中国美術コレクションの諸相
～「形成」と「活用」をキーワードとして

◆日時　2010年3月6日（土）13:00～18:00

◆場所　成城大学3号館3階　大会議室

◆発表

・川島　公之（繭山龍泉堂・成城大学民俗学研究所研究員）
「わが国の近代における中国美術コレクションの形成と変遷」

・外山　潔（泉屋博古館）
「住友コレクションの青銅器」

・齋藤　龍一（大阪市立美術館・成城大学民俗学研究所研究員）
「大阪市立美術館山口コレクションの中国彫刻」

・今村　佳子（成城大学民俗学研究所研究員）
「浦上コレクションの形成と活用」

・魏　文斌（麦積山石窟芸術研究所）
「甘粛省博物館美術品収蔵資料及利用」

・李　裕群（中国社会科学院考古研究所）
「山西省博物院収蔵資料」

◆コメント・問題提起

・八木　春生（筑波大学）

◆司会

・小澤　正人（成城大学）

CENTER FOR GLOCAL STUDIES
SEIJO UNIVERSITY

◆問い合わせ先
成城大学民俗学研究所グローカル研究センター
TEL：03-3482-1497（内線787）
E-mail:glocalstudies@seijo.ac.jp
http://www.seijo.ac.jp/research/glocal/index.html

ワークショップの主旨

成城大学民俗学研究所グローカル研究センターでは、政治・経済や社会・文化のグルーバル化が進む中で、同時に地域でローカル化が進展する現象を「グローカル化（Glocalisation・全球本土化)」として捉え、これをキーワードとして現在そして未来の社会・文化のあり方の検討を行っている。本ワークショップは、このようなグローカル研究の一環として中国美術コレクションを取り上げるものであり、「形成」と「活用」をキーワードとしてグローカル化の実態にアプローチしようとするものである。

まず「形成」についてであるが、日本における明治以降の中国美術コレクションは欧米でのアジアコレクション流行の影響を受けて発達したものであり、近代以降のグローバル化の過程で現れた現象とみなすことができる。同時に、各コレクションには程度の差はあれ江戸時代までの唐物趣味の要素が加わるなど、日本でのローカル化がみられ、グローカル化の影響がローカルの伝統により変容して受容されるという、グローカル化の一面も備えている。本ワークショップでは、日本における中国美術コレクションをグローカル化という視点から捉える試みとして、各コレクションの「形成」について個別事例の検討を行う。ここでは主にコレクションの形成の契機と過程が報告の中心となる。

次に「活用」であるが、今回報告される中国美術コレクションはいずれも公開されており、作品を通して中国文化のあり方を人々に伝える役割を果たしている。このように他文化を展示し人々に供することも、近代のグローバル化の産物である。しかし現代では人々が中国に行くことは容易になり、直接中国文化に触れることができるようになっている。そのため、現在、これまで各美術館・博物館で収集した中国美術コレクションをどう「活用」するかが問われようとしている。ワークショップでは各コレクションの所蔵者が、今後それをどう活用していくかを報告し、本来の文化的な脈略とは切り離されて移動した作品が、別の文化の地でいかに異なる意味を付与されて受容されるのかというグローカル化の実態を検討する。

以上のような作業を通して、ワークショップではグローカル時代の文化移転のありかたを明らかにする。

同時に比較のために中国においてどのように収蔵が行われ、活用されているのかについても、甘粛省博物館と山西省博物院を例として現地研究者から報告がおこなわれる予定である。